

# 腐敗する死体

——死体の表象の東西比較をめざして——

田 中 貴 子

- 一、はじめに
- 二、死体の「ニオイ」
- 三、腐らない死体
- 四、死後三日という期間
- 五、腐る死体
- 六、今後の見通し——おわりにかえて

日本の平安末期から中世前期にかけて、往生を果した人々の説話が「往生伝」としてさかんに編纂された。その往生を証明する要素として、死体が腐らない、腐敗臭がせずむしろ芳香さえ放つ、といったことがあげられる。また、反対に往生出来なかつたり臨終行儀に叶わない死に方をした者は、しばしば通常の生理現象のままに腐敗してゆくと描かれる。つまり、死体が腐らないことが一種の神聖化を表していると思われる。腐ってゆく死体は、人間の避けられない不浄である「死」の絶対性や無常を呼び起こし、「九相図」や不浄観と深いかわりを持っている。本論は、歴史社会学派の影響や生活文化史への関心から、ここ二十年ほどで研究の発展をみた人間の感覚の領域から文化を考えるという方法にのっとり、資料を再検討したものである。

## 一、はじめに

映画「おくりびと」の大ヒットに表れるように、現代は人の死に諸方面から関心が寄せられている。死体（軟組織ならびに骨）の研究は従来医学、人類学の手に乗ねられ、また、死の結果発生する葬式、儀礼などは宗教学や民俗学、そして「死」そのものの意味については哲学などがもっぱら担ってきたといつてよからう。しかし近年、資料に描かれた死体の状態の表現やその意味を考察する研究が増えつつあり、文学、歴史学、美術史学などの分野から多角的な「死体の解釈学」が生まれている。

これはアラン・コルバンらの歴史社会学派が行った、人間の身体や行為の史的意味に注目する研究に触発された部分もあるが、それ以前にも、日本古典文学に限れば仏教とのかかわりにおいて「往生」と「ただの死」との差がどのようにに表象されたか、という視点が存在し、そうした研究史の蓄積は大きい。

本論は、そうした研究を踏まえつつ、とくに死体の死後の経過によって当人の「死」がどのように解釈されるのかということをも平安末期から中世にかけての諸例から検討し、「腐敗する死体」と「腐敗しない（とされる）死体」の違いについて述べる。この二つの死体の状態が西欧中世の聖

人説話にも酷似することから、東西中世において「神聖な人」を判断する思考回路に共通点が見られたことにもつながっていく。ただし、西欧中世の聖人伝については原語の資料が多く、ヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』程度しか翻訳がないので資料的制約が大きいため、今回は東西説話の比較の可能性があることの指摘にとどめる。

## 二、死体の「ニオイ」

死体の「ニオイ」（以後、人間の臭覚としてとらえられるものは悪臭も芳香もこの語で表す）が死者の生前の徳の象徴となることは、早く往生伝類の研究で論じられてきた。本来の生理的現象において死体は「死」の直後から変化を開始するが、往生がかなった死者だけは奇瑞が出現するとされたのである。それは平安時代の浄土教信仰のもとに、浄土に生まれ得ることのしるしでもあった。たとえば『日本極楽往生記』等のいわゆる「往生伝類」に記述される奇瑞とは、おおむね「妙なる音楽が聞こえてくる」、「西の方に紫雲がたなびく」、「異香がたちこめる」、「光明が輝く」、「天地が振動する」などの要素によって表される。これらは聖衆来迎を示すものであるが、本節ではとくに「異香」、すなわち芳香という「ニオイ」に注目してみる。

往生のしるしのうち、紫雲や光明といった視覚に訴える

ものは居合わせた万人がともに確認しあうことができるが、異香だけは嗅覚というすこぶる私的な身体性にかかわる要素である。個人の官能に関わる「ニオイ」を往生のしるしとして記述することの意味は何だったのだろうか。

なお、身体が芳香を放つのは往生者だけの特徴ではなく、吉村晶子によれば、『源氏物語』の薫が生まれついでに体臭がきわめてかぐわしいものであったという例もあり、身体が芳香がその人を特別な人物として聖別する場合があったという<sup>3</sup>。薫の場合は必ずしも往生者と同一視できないが、平安貴族が薫き物などの嗅覚文化に精通し拘泥していたことや、高価な香木がステイタスシンボルでもあったことを考慮すれば、「ニオイ」はたしかにその人にプラスの評価を与えるものだったと思われる。

先に結論を示しておけば、死体の「ニオイ」は芳香である場合と腐敗臭である場合とに二分できるが、これらの「ニオイ」は当人の死を「往生」としてとらえるか、あるいは「凡愚の衆生の単なる死」ととらえるかという違いに直結するといえる。二つの「ニオイ」はそれぞれの「死」のあり方を示す証拠として対比され、芳香はしばしば、前述した往生の奇瑞のいくつかの要素と組み合わせられて「腐らない死体」という特別な「死」を人々の上に表出するのである。もちろん、その対極には「腐る死体」があり、後

節で触れるように六道のうちの人道の不浄たることを説く「九相詩」やそれを絵画化した「九相図」（『九相詩絵巻』とも）が死体が腐乱してゆくさまを如実に描くのもそのためである。

「腐らない死体」は芳香を放つ死体とほぼ同義に考えられたと思われ、単に往生の瞬間だけではなく、時間がたつても腐敗せず生前の姿をとどめるという記述をとまなうことが多い。これは、往生者が「腐る人間」という生理的宿命を超越し、特別な人、西欧中世でいえば「聖人」のごとき存在となったことを意味しているよう。

このことについては、すでに千々和到や吉村晶子が論じている<sup>4</sup>。吉村は、キリスト教、イスラム教、ヒンドウ教、道教などの宗教における儀礼で「聖なる匂い」が用いられ、それは特権化された「聖なる匂い」として機能していたと述べる。また、往生人の異香が往生決定のあかしであることも、千々和の論に基づきつつ「往生要集」を引用して指摘している。吉村論文から本論と関連深い箇所を次に引用しておこう。

往生伝においては、基本的に、往生人の死体は朽ちてはならない。「死体不爛壞」「容顔不變」などといったことばで、死体が生前のままの姿を保っていることが

示され、往生が決定されるのである。朽ちてはならない死体は、むろん腐臭を漂わすわけにもいかない。

では、時代を追いつつ「往生伝類」に見える「腐らない死体」（「芳香を発する」）の特徴的な例をあげてみたい。吉村論文と重複する用例もあるが、やや趣旨が異なることを断っておく。

まず、「往生伝類」の嚆矢というべき、慶滋保胤の『日本極楽往生記』（十世紀）には、次のような例が見いだせる（以下、断らない限り引用は『日本思想大系 往生伝法華驗記』による。便宜上通し数字を付けた）。

1、太子ならびに妃、その容生きたるがごとく、その身太だ香し。  
（聖徳太子）

二種類の傍線で示したように、平安時代に往生者として位置づけられた聖徳太子の死体は、芳香だけではなく生前と変わらない姿、つまり「腐らない死体」であったことが記される。これは聖徳太子が「聖化」した証といえる。

ただ、日本のように四季による気温の変動が激しい土地においては、厳寒期などでは死体の腐敗が当たり前の現象だとはいえないだろう。夏季や腐敗しやすい環境にあつて

さえなお芳香を放ちまったく形を変えないことが重要だったと思われる。次に引用した例は「暑月」でも腐敗しないことが一つの奇蹟として特筆に価したものと見られる。

2、暑月に遇ひて数日を歴たりといへども、身は爛壞せず、存生の時のごとし。  
（高階真人良臣）

他にも芳香と「非腐敗」の組み合わせの例をいくつか列挙しておく。

3、高階敦遠の室「十ケ日を送りて、葬斂の時に至りぬ。暑月に当るといへども、身爛壞せず、一句を経たりといへども、香しき氣四に散ず」

（『拾遺往生伝』下巻二十五）  
4、参議藤原の為隆「時に夜漏曉に及び、奇香室に薫はし。僧徒皆以ておもへらく、往生の人なりと。後数日の間、容顔変らず。肌膚猶し軟かなり」

（『後拾遺往生伝』下巻二）

いずれも、死後数日の間芳香があり、腐敗することがなかったというものである。3、4ともに後に死体は茶毘に付されているので、火葬までの間だけの奇瑞かと思われが

ちだが、おそらくそのまま放置しておいても変化はないというのが基本的な考え方だったと推測される。その証拠となるのが、聖徳太子についての言説である。次の5は、鎌倉時代に聖徳太子とその母、后が葬られているとされる磯長廟に入った者の見聞として記された記事であるが、きわめて長い期間にわたって太子の身体 of 奇瑞が保持されるという伝承があったことがわかる。

5、太子は実に容儀存日の如く、床上に眠るが如し。

(中略) 異香廟中に薫じたり。

(顯真『聖徳太子伝古今目録抄』(荻野三七彦・編))

芳香を発するという本来往生者の特性であった要素は、時代が下ると「身体が腐敗しない」という一点に集約されてゆく。芳香を特記するというより、「腐敗臭がない」という表現が増えてゆくのである。死体の腐敗が忌むべきものであり、端的な「凡愚の衆生」の証になることは、次の6の例から知られる。これは、越後の鵜取上人が臨終に弟子たちに言い残した言葉である。二重傍線に注目したい。

6、乃至臨終の時に、弟子に告げて言はく、今月十三日は、これ滅尽の剋なり。臭穢の死骸を留め、汝等を

して荷担して山野の往還せしめば、これ大きに悲しきことなり。  
(『大日本法華驗記』中巻)

この上人は、万一自分が往生できなかった場合に備え弟子にこう言ったのだが、実は往生の失敗をおそれて死を自覚した後みずから焼身して果てることになる。ここからは往生の失敗がいかに不名誉なものか、そして、不往生が腐ってゆく臭気漂う死体によって周知されたことがわかる。腐敗するに任せた死体は、自分がただの「不浄な肉の塊」にすぎないことを雄弁に物語るのであった。

### 三、腐らない死体

では続いて、「腐敗臭がない」⇨「肉体の不変」が説かれる「聖化」された人々の説話から例を挙げてみたい。

7、別記に云はく(中略)後見るに爛れ壞れず、云々といふ。  
(沙門増賀『続本朝往生伝』)

8、弟子等その遺言に依りて、棺の中に居き、地下に瘞めたり。身体爛れ壞れず。

(沙門仁賀『続本朝往生伝』十三)  
9、この時上人驚き恐れて、墓を撥き棺を開に、塵埃これを埋みたり。払ひ拭ひて見れば、身体爛れず、

定印変ることなし。

(肥前国小松寺の上人『拾遺往生伝』下巻十一)  
10、室を開きてこれを見るに、顔仏前に向ひ、手定印を結ぶ。威儀乱れず、端座して入滅す。(略) 早に殯斂せず、三七日を経るも敢て臭気なし。

(勝尾寺の証如『後拾遺往生伝』上巻十七)  
11、氣絶ゆるの後、奇香室に薫しく、和顔存せるがごとし。(中略) 葬斂の間、敢て臭氣無し。

(上人経源(暹イ)『後拾遺往生伝』中巻二)  
12、決死の剋、氣絶の後、念仏して啓動き、身体膚軟かなり。深窓の中香氣常に在り。数日の間、臭穢全く無し。  
(藤原の姫子『後拾遺往生伝』中巻二十)

この他にも多数例はあるが、僧侶の死についての記事が比較的多く、12は女性の死の場合でも同じ現象が発生したとされたことがわかる。7の増賀の死の様子は『元亨釈書』巻十にもある。「自分が没した後、三年は墓を開くな」と命じて死んだ。後三年たって開いてみると、全身が壊れずただ衣装だけが朽ちていた」という内容であり、長期間の非腐敗が彼の徳の高さを語るようになっていく。11、12は死の直後から数日間の出来事であるが、8、9、10のように後に死体の安置所(「棺」など)を開いてみるととも

のままであった、という例も少なくはない。増賀や仁賀などは自らの死体に変化がないであろうことを予告さえしている。これらは永遠の「聖化」を強調するためと思われる。

これは往生とはいえないが、よく知られた弘法大師空海が「死」ではなく「入定」した、と伝えられる説話(空海の弟子、真済筆の『空海僧都伝』)と共通している。史実としては火葬されたらしいが、現在でも高野山奥の院に空海の変わらぬ姿が「ある」といわれており、毎日僧侶によって食事が運ばれるたり、ひげそり、着替えなどを行う儀礼も続いている。十世紀成立の『金剛峯寺建立修行縁起』では、

七々御忌に及び、諸弟子等臨み見るに、顔色衰えず髻髪更に長し。  
(弘法大師伝全集第一巻、書き下し)

と、あり、また十一世紀初頭の『政事要略』(巻二十)にも記される。

大師入滅の後、その身乱壊せず。猶高野にあり。希代のことなり。  
(国史大系本、書き下し)

空海の場合は身体が腐敗しない、というよりさらに積極

的に「まだ生きてゐる」という点を強調するのがやや異なつてはいる。次に引用したように、高野山に参詣した藤原道長が空海の姿を目撃したという詳細な記事が『栄花物語』「うたがひ」にあり、貴族層にも広範囲に流布していたことが明らかである。「御髪青やか」というのは、定期的な剃髪が行われていることとともに、そり跡の青さが空海の生命力の強さを表していかにもなまなましい。

大師の御入定の様を覗き見奉らせ給へば、御髪青やかにて、奉りたる御衣いさゝか塵ばみ煤けず、鮮かに見えたり。  
(大系本)

死体の腐敗や破損がないことを以て往生確定を予言する例もあり、これらを併せ読むと、いかに「非腐敗」ということが「死」に際して大切であつたかがうかがわれる。典型的な例を引用しておこう。

13、子息に告げて云はく、我れ年来往生を願へり。死後 三箇日、斂葬をすべからず。もし身体爛壞せざれば、必ず往生の瑞となすべしといふ。(中略)遂にもつて披くに、その体平生の如くして、敢て変ずる気なし。髻髪五、六寸、生ひてへうへうたり。

(入道の忠犬丸『後拾遺往生伝』中巻十七)

興福寺の大童子であつた忠犬丸は往生の志篤かつたが、傍線部のように死後三日間という期限をつけた上で死体が腐敗しなかつたら往生であると予告し、まさにその通りになった。あまつさえ、空海を思わせるようにヒゲが伸びてなびいていたというのは、一般人の往生の仕方としては理想的と考えられただろう。

また、不浄な死体の証としては犬や他の鳥獣に食われてしまうというところがあり、六道絵の「人道不浄の相」や「九相図」の「噉食相」がそれに相当する。「地獄草紙」などの絵巻には死体を墓場(鳥辺野や蓮台野など)に運んで放置し、一種の風葬が行われる風景が描かれているが、そこには犬と鳥が死体を食う動物の代表として現れる<sup>(5)</sup>。しかし、不浄でない者、高德の者はいくら野に放置しても動物に食われないとされることがある。聖であつた賀古の教信がそれに当たる。永観の『往生拾因』から引用しておく。

その廬上に当たりて鴉鳥集ひ翔ぶ。漸く近寄り見れば群狗競ひて死人を食らふ。傍らの大石の上に新たなる髑髏あり。容顔損はず。眼口咲むに似たり。香氣薫馥たり。

(『大正蔵第八十四巻』93b)



「髑髏」といっても軟組織のなくなった頭蓋骨ではなく、首のことであろう（ちなみに、賀古教信寺には南北朝時代の教信の首の木彫が安置されている）。そばの老妻というには、教信は死後三日たつという。

13の忠犬丸もそうだったが、死後永遠の「腐らない死体」となるかどうかを判別する期間を三日間と限っている例は多々見受けられ、教信も例外ではない。死の直後は芳香を発し、三日間死体に腐敗等の変化がないというのが、人が「聖化」されるための必須の条件であると考えられる。では、この三日間には具体的な意味があるのか、他分野の資料も用いて論じてゆきたい。

#### 四、死後三日という期間

『源氏物語』には、六条御息所らしき生霊に悩まされた葵上が男子を出生後急逝する場合がある。除目の夜の人少なな邸内で急に胸の差し込みに襲われた葵上は、高僧の祈禱も間に合わず息絶えてしまう。葵上の遺体は、「死」の判定が出来ないまま二、三日その状態で安置されるのである。

御物の怪のたびたび取り入れたてまつりしを思して、  
御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど、や

うやう変りたまふことどものあれば、限りと思しはつ  
るほど誰も誰もいといみじ。（『葵』巻、新全集本）

死者の体を北枕西向きに治す「枕がえし」をしなかったということは、点線部のように葵上がしばしばモノノケに取り憑かれて仮死状態に陥っていたことから、今回もその可能性があるゆえ「死」と断定出来なかったためであろう。蘇生の可能性を求めて、親の左大臣は遺体を二、三日見守ることにしたのである。しかし、三日ほどたつと遺体は死相を表すようになり、その段階ではじめて家族は葵上の「死」を確認出来たということになる。<sup>(6)</sup>

医学史の諸書には、根拠は明示されていないものの、平安時代までの「死」の判定基準を「息の有無」に置いていたとある。<sup>(7)</sup>従って、『源氏物語』の当時では脈の有無ではなく実際に息をしているかどうかを、おそらく何らかの目に見える手段によって確認するしかなかったと思われる。ちなみに、息の有無で生死の別を判断することは儀礼上ではあるが現代韓国にも残っているという。<sup>(8)</sup>

葵上の「死」が確実となったのは、傍線部のように死相が誰の目にもはっきりと見えるようになったからである。この死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。葵上は臨終の作法に叶った往生が出来なかったわけだが、死体



放置の理由は彼女が生霊に取り殺されたと解釈されたからである。

ここで注目したいのが、墓上の「死」（よい「死」ならば往生となる）の判定期間が「二三日」とされている箇所である。先述の千々和論文では、源信の撰である『横川首楞嚴院二十五三昧起請』に「死」に関わる三日間という具体的な日数が記されていることを取りあげている。当該書第十条は念仏結衆の墓地の用意と葬り方を定めており、「一結の死人、三日を過ぎず、すなわち日の善惡を論ぜず、葬るべし」として、三日を過ぎれば遺体は墓所に葬るという取り決めがなされていたのである。これについて千々和は次のように述べている（傍線は筆者）。

その遺体処理の限度として三日という具体的な日数が示されていることは注目してよい。前の往生伝の例において、三日を越えて腐敗しなかった場合が奇瑞であるのと、これは完全な対をなす。通常の場合に腐敗の程度や臭気がまんでできる限度という物理的な時間が、当然ここには表現されている。同志たちの遺体が腐り、臭気を発し、つまり人びとに彼の死が往生ではなかったのではないかという疑いをいだかせる前に、遺体はどうしても処理されねばならなかったのである。

もし念仏結衆が往生出来なかったら、それは結社自体の存在意義を危うくすることになる。そのため、腐敗の様相が顕著になり始める時間的な境界線として三日間という数字が生まれたと思われる。この三日間（七十二時間）は平安時代の人々が経験的に知ったのだと想像されるが、現代の法医学によっても裏付けられる数字である。地方によって気温や湿度の差はあるが、人間の死体が放置された場合、腐敗が視覚的・嗅覚的に誰の目にも明らかに認知される基準として七十二時間が必要なのである。

一般的な法医学書の記述によれば、死体は死後一、二時間で急速に体温が低下し、血液就下、体表乾燥、死後硬直の後、約二十時間経過すると硬直が緩解し腐敗の進行が増すという<sup>⑨</sup>。死後二十四～四十八時間で死体の下腹部は青藍色を呈し、三～四日で皮下の血管が皮膚を通して枝状に見えるようになる。腐臭は組織を形成するタンパク質の変化により悪臭を伴うガスが発生するために起こる<sup>⑩</sup>。この状態は「九相図」でいうと「壞相」に相当するかと思われるが、皮膚の色の変化と腐臭により、「死」が万人に判定されることを意味する。おそらく墓上の場合も、こうした変化により蘇生不可能で絶対的な「死」が万人に判別されたものではなからうか。

三日という数字は、このように経験に裏付けられたもの

だったと考えられる。腐敗臭によつて表象される死体とは、往生からはほど遠く、ケガレに満ちた存在であつた。腐らない死体が聖別されるべきものであれば、その対極にある腐った死体は、たとえば「九相図」のように人間の無常や避けようのないケガレを表すことにより、「死」の絶対性とそれへの忌避観を示すものとなつたのである。

次節では、そうした用例を見てゆくことにしたい。

## 五、腐る死体

腐敗した死体が発する腐臭については、『今昔物語集』巻十九の大江定基の出家譚に如実にうかがうことが出来る。愛する女性の死を受け入れられなかつた男が、腐臭に出遭うことで無常を痛感するという著名な話である。

其後、定基悲び心に不堪して、久く葬送する事無くして、抱て臥たりけるに、日来を経るに、口を吸けるに、女の口より奇異き臭き香の出来たりけるに、疎む心出来て、泣々葬してけり。  
(新大系本)

あさましい腐臭によつて女の絶対的な「死」が確定してしまうという点で、本話の背後には腐らない死体と腐る死体の差異という文化があると思われる。これは実際の腐

臭だが、同じく『今昔』巻二十四には、死体の絵が幻臭を喚起するという話が収められている。百済川成が飛驒の工と争い、仕返しに建物内部に死体の絵を描いて工人を驚かすくだりである。

廊の有る遣戸を引開たれば、大きな人の黒み脹臭たる臥せり。臭き事鼻に入る様也。(中略)早う、其死人の形を書たる也けり。  
(新大系本)

絵に描かれた死人に腐臭はないはずだが、その姿を見た瞬間反射的に幻の腐臭を感じるとするのは、死相を表した死体＝腐臭のするものという図式が文化として刷り込まれていたからであろう。このように視覚と嗅覚によつて人間に知覚されたとき初めて遺体は死体となり、生者とは異なる世界に所属する存在として忌避されたのである。

もちろん、この腐臭という二オイは『往生要集』にすでに記され、「九相図」作成のもととなつた『摩訶止観』巻九・上の「臭処の蓬勃たるを見る」や、伝・蘇東坡の「九相詩」「方乱相」の「風臭氣を伝ふこと二三里」などから、「死」の象徴として周知されていたし、『閑居友』に見られる「不浄観」と深く関わることは言うまでもない<sup>12</sup>。とくに『閑居友』「宮腹の女房の不浄のすがたをみする事」に

見える、敢えて人道の不浄さを見せることで僧侶の淫欲を戒める箇所は、香などの人工的な芳香と自然の腐臭とが対立的に描かれていて興味深い。

さまぐのほかの句をやとひて、いさゝかその身をかざりて侍れば、なにとなく心にくきさまに侍にこそありけれ。(中略) 血ところぐつきたる衣のあり香、まことにくさく耐へ(忍)がたきさまにて、

(三弥井書店・中世の文学)

人工的な芳香は、往生における奇瑞たる異香とはまったく異なるものであると考えられていたことがよくわかる。類似の例として『発心集』巻第四「玄寶、念を垂相の室に係くる事」も引用しておく。

いはば、描ける瓶に糞穢を入れ、くさりたるかばねに錦をまとへるが如し。もしたとひ、大海を傾けて洗ふとも、きよまるべからず。もし梅檀をたきて匂はすとも、久しくかうばしからじ。(集成本)

いずれも女性が不浄観の機会を作るという点で共通するので、女性に対する血のケガレへの忌避なども関与してい

る話であろう。先引の吉村論文からは、人工的な芳香を欠かさない匂宮と生得的な芳香を持つ薫との対比が導き出せるが、その場合の薫は自然な芳香によつて聖化された人物として描かれていた。物語ゆえの屈曲はあるが、ここにも「人工的な芳香では消せない腐臭を発する腐った死体」と「聖別されたあかしとしての自然な芳香を放つ腐らない死体」という文化的な対比の図式が隠されていると読めるかも知れない。

## 六、今後の見通し——おわりにかえて

以上、粗々であるが死体にまつわる二つの二オイについて、主に古代後期から中世前期にかけての資料を俯瞰してきた。この二オイと奇瑞については、日本だけでなく諸地域における伝統的宗教世界において共通の説話が残っている。「はじめに」で触れたように、西欧中世の聖人説話の集大成といえるヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』には、死体が長年傷まなくて生前のままのようである、腐敗臭がない、かぐわしい二オイが立ち上る、など、本論に引いた説話と酷似した話が相当数見られる<sup>13)</sup>。

だが、なぜ西欧中世の聖人説話と日本の高僧・聖人説話が類似するのか、また、日本に諸方面で影響を及ぼした中国や朝鮮半島ではそのような説話があるのかなど、今後考

えるべき課題は山積しているといえよう。こうした、いわば「死体の文化史」は、全ての生物に平等に与えられた「死」をどのように考えるかという問題とも関わってくる。本論では意を尽くせなかった課題については、いずれ稿を改めて取り組んでゆくこととしたい。

#### 付記

本稿は、説話文学会大会（二〇〇八年六月二十九日、於・熊本大学）での発表「腐る死体と腐らない死体——説話の東西比較の視点から」に基づいている。席上、ご教示を賜った方々に感謝申し上げます。

#### 注

- (1) 往生伝における異香や奇瑞については以下のような論考がある。西口順子「浄土願生者の苦悩——往生伝における奇瑞と夢告」（古典遺産の会編『往生伝の研究』新読書社、一九六八年）、関口忠男『日本往生極楽記』の浄土往生思想をめぐって——平安時代浄土往生思想の一考察（同右所収）、保立道久「匂いと口づけ」（『中世の愛と従属——絵巻の中の肉体』平凡社、一九八六年）、千々和到A「仕草と作法——死と往生をめぐって——」（『日本の社会史 第8巻生活感覚と社会』岩波書店、一九八七年）、千々和到B「往生の香り・死の臭い」（『図説日本の仏教 第3巻浄土教』新潮社、一九八九年）、永藤 靖「遺体と異香の幻想——『法華験記』の身体観——」（『古代仏教説話の方法——靈異記から験記へ——』三弥井書店、二〇〇三年）。

- (2) 吉村晶子「身体が匂う」ということ——薫の体香の再考へ向けて」三田村雅子・河添房江編『源氏物語をいま読み解

く2 薫りの源氏物語』翰林書房、二〇〇八年。

- (3) 河添房江「光源氏が愛した王朝ブランド品」角川選書、二〇〇八年、京楽真帆子「平安京貴族文化とにおい」（三田村雅子・河添房江編『源氏物語をいま読み解く2 薫りの源氏物語』翰林書房、二〇〇八年）など。

- (4) 注(1)千々和論文A・B、注(2)吉村論文。

- (5) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社、一九八六年。

- (6) 葵上の例は今西祐一郎氏のご教示による。

- (7) 八十島信之助『法医学入門』中公新書、一九六六年。

- (8) 鄭至娟「韓国の葬祭」（『年報2008』東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復彫刻研究室）には、「人中に綿を載せ動きを見る『属絃』を行い、臨終を確認して『哀哭辯踊』（痛哭）する」とある。「人中」は鼻と上唇の間のくぼみのこと。

- (9) 注(1)千々和B論文。

- (10) 津田征郎『新法医学』日本医事新報社、一九八一年。

- (11) 注(7)八十島著書。

- (12) 九相図については山本聡美・西山美香編『九相図資料集 成』（岩田書院、二〇〇九年）に参考文献が網羅されている。

- (13) 『黄金伝説』全一七六話のうち腐らない死体が聖人の奇蹟となった話としては、聖ペトルス（一三世紀の人）、聖ゲルファシウスと聖プロタシス（二世紀頃の人）、聖ナザリウスと聖ケルルス（三、四世紀頃の人）などがある。死体の非腐敗については Camporesi, Piero "The incorruptible flesh", Cambridge Univ. Press 1988, 青山吉信『聖遺物の世界 中世ヨーロッパの心象風景』（山川出版社、一九九九）などを参照のこと。